

大切にしたい”もてなしの心” 日本の伝統に学ぶ 21世紀のオフィス文化

日本伝統の柔軟性のある「仕切り」が世界的にも注目され始めている「理由」



内田 繁氏
デザイナー

1943年、横浜生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。81年、スタジオ80設立。代表作にYOHJI YAMAMOTOの店舗、京都ホテル・ロビー、神戸ファッション美術館、門司港ホテルなどがある。毎日デザイン賞、第1回桑沢賞ほか多数受賞。著書に『インテリアと日本人』『椅子の時代』『日本のインテリア』などがある。



イタリアミラノで行われた展覧会より ©Thomas Libiszewski

1980年代の米国で見つけた 開放的で明るいオフィス空間

先日、米国のオフィス研究関連のシンポジウムから、講演をしてほしいという依頼がありました。初めは、自分の得意とする空間論とは違うテーマだという気がして戸惑っていたのですが、考えてみれば、人の働くスペースにおいてもデザインが重要な役目を果たします。そう思っているうちに、私も少しずつ、オフィスに興味を持つようになってきました。

今まで目にした中で、最も強く印象に残っているオフィスは、サンフランシスコにあったファッションメーカー「ESPRIT(エスプリ)」の本社です。最初に感じたのは、「空気が流れているなあ」と思わせる開放感でした。私が訪れたのは1985年ごろで、当時、米国企業のオフィスといえば、個室タイプの閉鎖的なものが多かったのです。しかしエスプリの社内には低い間仕切りがあるだけで、全体が見通せます。

「どうして、こういうデザインにしたの？」

私は経営者に尋ねました。すると返ってきた答えがよかった。

「とにかく明るい会社にしたかったのです。電話がかかってくる時、出た人が『ハイ、エスプリです！』と元気に応えれば、会社のイメージは、ずっと良くなりますよね。ただそれは、規則で決めたからといってできるものではない。ですから、まずオフィスを楽しめる空間にし、働く人が自然に明るくなれるようにしたかったのです」

その工夫はデザインだけに留まりません。オフィスの一角にカフェがあり、従業員は、朝、出勤すると、まずそこで1杯のコーヒーや、お茶を飲みます。カウンターにはベーグルとバター、ジャムが用意されているので、簡単な食事もできる。また、ランチタイムにもゆっくり談笑する人々の姿が見られました。

驚いたのは、そのカフェにちゃんと専属のスタッフがいたことです。あたたかいコーヒーやベーグルをいつも絶やさないようにし、みんなに気軽に話しかける。そんなサービスも、オフィスの明るさにつながっているのでしょう。

ただ施設をつくるだけでなく、そこをできるだけ有効に活用することで社内の空気を演出していく。私は「まさに生きているファシリティだなあ」と感心したものです。

日本の伝統に学ぶ
21世紀のオフィス文化

はやわかりメモ

- 日本の伝統である開放的な空間づくりの思想が、欧米では注目されている。
- 壁で物理的に仕切るだけでなく、規律や規範によって場を分ける「認知的仕切り」をつくってきた日本人。
- 開放的な空間は四季を感じることができる。物理的にオープンな部分が少ない空間であっても、外界との接点をつくることで開放感を得られる。
- 働く人を明るくし、コミュニケーションを活発にするためには、今、日本人が得意な開放的な空間づくりの思想をオフィスにも活かすべき。

開かれた空間をつくるのが得意な 「日本人」が忘れかけているもの

「開放的である」というのは、実は非常に大切なことです。

もともと西洋社会では、頑丈な壁で部屋をつくり、空間を分けていました。人の居場所を物理的な仕切りで区別していたのです。

これに対して日本の伝統社会はかなり曖昧です。仕切りといっても、それは簡単に壊してしまえるような襖や障子に過ぎない。しかしそれでも、ちゃんと空間の区別はできていた。たとえば、「この部屋は子供が入ってはいけません」といった教育によってモラルが守られていた。壁のような頑丈な仕切りはいらなかったのです。これを私は「認知的仕切り」と名づけました。

ところが、このような社会規範が崩れてくると、日本式の仕切りは非常に弱い。従来は入ってはいけないところにも、節度なく侵入するものが出てきてしまう。その結果、だんだんと西洋の真似をして、物理的な仕切りをつくるようになってきたのです。そのもっとも顕著な例が、今のオフィスなのかもしれません。

たしかに、仕事上、情報の管理は必要でしょう。しかし、それは、ただ細かくオフィスの内部を壁で仕切ったり、セキュリティシステムで自由に移動できなくすることで守れるわけではない。そのせいで従業員のコミュニケーションが阻害されれば、もしかすると仕事上のマイナスは、かえって大きいかもしれないのです。

ところが、今のオフィスはそんな考えもなく、ただただ物理的な仕切りをつくる方向に進んできたように思います。面白いことに、最近の欧米、特にヨーロッパでは、むしろオフィスや家の中の仕切りは簡略化するような傾向があります。しかも、そのお手本が日本だと言うんですね。開放的な空間のほうが人は自由にコミュニケーションを行えるので仕事上のメリットは大きいし、なにより、みんなが明るくなれる。彼らはそれを、日本の古い建築などから学んでいるというのです。

これは考えるべき問題でしょう。人を信頼し、規範と節度を持って空間を設計すれば、何もすべて壁で守らなくてもいい。強固な仕切りが絶対的な存在ではないのです。

ものは自然に壊れるのではなく 人間が壊したり、守ったりする

こんなことを言うと、セキュリティ思想の信奉者は反論するかもしれません。

「壁が弱かったら簡単に壊れてしまうじゃないか！ それでは情報は守れない。やはり、空間は強固な壁で仕切るべきだ」

米国によくあるブルート型の発想ですね。過剰なまでの力によって守る方法が正しいと信じる文化です。

しかしこの人は誤解しています。世の中に壊れないものなんてありません。しかも、それは「自然に壊れる」のではなく、多くの場合、「人間が壊す」のです。

いい例が、京都などにある古い茶室ですね。木と紙だけでつくられた建物は、機械を使わなくても簡単に壊すことができます。それでも、なぜ、何百年も残っているかといえば、それは、人が壊さないように努力してきたからなんです。そう、使う人に「守ろう」という気持ちがあれば、ものは壊れないんです。それは決して、頑丈とか柔とか、そういう問題じゃない。どんなに強固な壁で囲っても、人が壊す気になれば侵入することはできるし、情報は守れません。

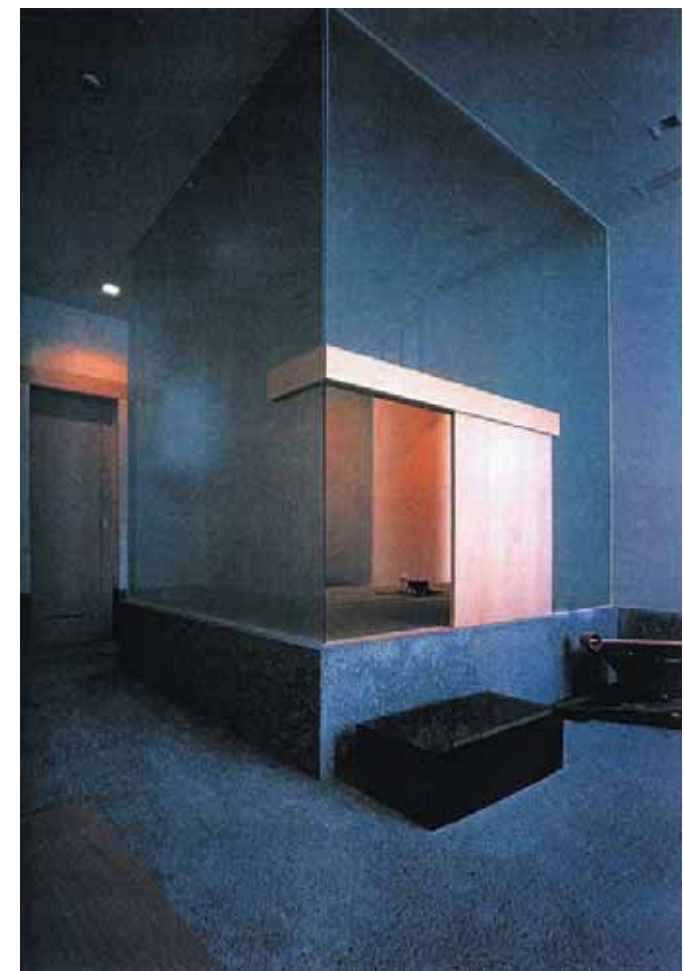
それなら、最低限、必要などころだけに物理的な仕切りを設置し、通常のオフィス空間は開放的なデザインにしたほうがいいのではないのでしょうか。そして、従業員が会社に愛をもち、楽しく仕事をするような環境を整えれば、認知的な仕切りだけでも、十分に規律は維持できます。むしろ、働く人のモラルをなくさせてしまう経営方法にこそ、問題の本質が潜んでいるような気がしますね。

小さな力が集まって大きな仕事をする そのほうが健全な状態を長く維持できる

この前、マイクロマシンの研究をしているという人と話をし、面白いと思いました。彼らの発想は、今までとまったく逆なんです。従来の機械工学的な考え方では、大きいものを動かすとき、それに合っただけの巨大な運搬機を用意します。これは確かに簡単な方法です。しかし、もしその機械が壊れてしまったら、もう運ぶことはできません。

マイクロマシンの世界では違う考え方をします。まず、小さい機械をいくつも用意し、それらの力を合わせて大きなものも動かしてしまう。これは一見、大変なように思えますが、実は非常に合理的なのです。というのも、たとえ機械のうち、いくつかがサボっていたとしても、他の機械がカバーし、仕事をこなしてくれるのですから。

阪神大震災のとき、「もしライフラインが大動脈を中心に構成されているのではなく、小さい単位で細かく張り巡らされていたら、こんなに被害が拡大しなかった」といわれました。1カ所が切断されても、他のルートで



門司港ホテル内にある茶室 ©NacasaPartners inc.



茶室を現代に再生。どこにでも移動して設置できる ©Nacas&Partners inc.

何かトラブルがあったとき(それは必ずあります)、被害を最小限に食い止めるのは、小さな力の集合体です。大きな力は、仕事をするか、まったくできないか、2つに1つしかありません。日本文化における仕切りの構造は、まさにこれなのです。一人ひとりの人間が節度を持ち、規範を守るから、頑丈な壁をつくらなくても社会の秩序は守られる。お茶を嗜まない者が茶室に乱入することのない社会だったからこそ、木と紙の建物でも何百年も残るのです。

開放的な空間に暮らす人々は世の中の変化に敏感になる

仕切りを簡易にして開放的な空間をつくと、どんなメリットがあるのでしょうか。

まず、変わるのは、世間の変化に敏感になるという点です。庭に向かって大きく開いた日本建築では、部屋の中にも季節を感じられます。春には春の花が咲き、やがてそれは枯れる。しかし次は別の花が咲くし、また翌年になれば、枯れた植物は再生している。そんな自然の循環を、日本人は静かに観察してきました。

そしてこのような文化は、人々の生活にしっかり根付いていたのです。たとえば、庭がない家では、室内に花を飾ることで、自然の変化を感じるように工夫しています。あるいは、雛祭りや端午の節句といったお祭りも、目的は同じです。

ところが近代になり、西洋式の住宅が増えてくると事情は変わってきます。居住空間においてできるだけ「無駄」をなくそうと、ものを飾るスペースがどんどんなくなっていった。このため花を飾るような家は少なくなったし、雛人形も端午の節句の飾り付けもできません。これははたして進歩といえるのでしょうか。

これはデザイナーの罪でもあります。明治時代以降の近代化の中で、西洋的な建物をつくり、空間の設計を真似ることが素晴らしいと提唱してきた。さらに敗戦によって米国文化が一気に入ってくると、ますますその傾向は強まります。

もちろん、すべて日本の古い形を守ることがいいとは言ってません。ただ、新しい文化が入り、どちらを選ぶかといった局面でもう少し冷静に考えてもよかったです。

欧米に優れたものがあれば採り入れるし、もし、日本にもっといい伝統があれば、それはきっちり守る。そういう作業をしてこなかったばかりに、今、私たちのまわりには、使いにくい空間が溢れているのです。



上部写真の内部 ©Nacas&Partners inc.

オフィスに雛人形を飾ってもいい そんな柔軟な空間が人を明るくする

オフィスの話に戻しましょう。今の日本のオフィスの多くは、まだ、このような思想に取り憑かれています。高い間仕切りでスペースを細かく分けたり、できるだけ空間の余裕を減らそうとしている。そして、時間的にも季節的にも均質な環境をつくるのが「進歩」だと思い込んでいるのです。しかし、その結果として、本当に働く人の能力が発揮されるようなオフィスになっているのでしょうか。

機械が主役の工場なら、季節感はいりません。365日24時間、同じ環境を保ち、設備を安定して動かせばいいでしょう。でも、人間はそうはいきません。昼も夜も無いような空間に押し込め、ひたすら仕事をさせたら、どんどん効率が悪くなっていくだけです。ゆとりのある環境でなければ、人の生産性は上がらないのです。

したがって、人が本当に活躍できる空間をつくるには、どこかで開放感を演出し、気分を明るくさせる工夫が必要です。もちろん、建物の構造上、大きな窓に面したスペースばかりがあるわけではありません。それなら、昔の日本人のように飾り付けをしてもいいでしょう。花を生けたり、季節感のある観葉植物を置くだけで、ずいぶんと雰囲気は変わるものです。

3月が近づいたら、オフィスに雛人形があってもいいでしょう。「仕事の



ガラスを通して美しい外光が差し込む設計 ©Nacas&Partners inc.

場所にそんなものいらない」と考えてしまう人は、本当の意味で「働く」ということがわかっていません。出勤して雛人形があったら、どうなるでしょうか。おそらく多くの方はそこで立ち止まり、季節の移り変わりを強く感じるでしょう。それは生きるためにも大事だし、仕事上でもプラスにはなりませんか？ 少なくとも私は、季節に無頓着な人と一緒に仕事はしたくありませんね。

さらに雛人形の前で立ち止まった人は、次に、横にいる人と話をするかもしれない。「子供のころ、雛人形がほしかったんですよ」といった話題から会話が生まれれば、それは貴重なコミュニケーションです。職場における人間関係づくりに、大きな効果があるはずです。

一見、無駄だと思われるものでも、人が快適に生活するために必要なものはたくさんあります。ところが、今の企業の組織では、そういう工夫をする人がいないどころか、そのための空間すらない。そして、息のつまるような閉じられた部屋が並んでいるだけなのです。

オフィスだけが日本の文化から乖離しているおかしさに気づこう

日本は古来から、海外の文化をうまく吸収し、自分の文化に合わせていくことで社会を進歩させてきました。つまり、外在を内在にアレンジしてきたのです。たとえば、私たちは靴を脱いで家に入ります。これは、西洋化された住宅に住む人も変わりません。

中国はもともと靴を脱ぐ文化があったのですが、北方の異民族などと戦っているうちに彼らの生活習慣を受け入れ、土間で暮らすようになりました。テーブルと椅子、ベッドの文化になってしまったのです。しかし、日本人は千年以上にわたって中国文化から学び、影響を受けてきたのに、靴を脱いで生活する文化は受け入れることができませんでした。

実は、その文化が最初に壊されたのがオフィスなんです。近代化の中

第1回

仕切りの構造

日本伝統の柔軟性のある「仕切り」が世界的にも注目され始めている「理由」

で西洋式のオフィスが定着し、仕事中は靴を履き続ける習慣が浸透しました。つまり、日本のオフィスの歴史は、最も伝統文化と離れていく方向で進んできたため、今でも、日本らしくない空間づくりが正しいと思われるのです。

しかし、そろそろ考え直してみてもいいのではないのでしょうか。オフィスで靴を脱げるとは言いませんが、日本の伝統的な文化の中で、今のオフィスを快適にする工夫があれば、もっと積極的に採り入れていいように思います。ひと言だけ付け加えておきますが、私は決して、「古いものもいい」と主張する懐古主義者ではありません。もちろん「海外はダメで日本がいちばんだ」と考える攘夷論者でもない。ただ、今の住まいやオフィスを見たとき、西洋化だけが進んできたこれまでの風潮をちょっと反省し、改めて日本の伝統的な空間づくりから学ぶものがあると気づいたのです。そして同じことは、最近では欧米の人も言っているのですから、あながち、まちがいでないでしょう。



壁で仕切るだけがオフィスの進歩ではありません。むしろ、もっと自由に空間づくりをし、柔軟な仕切りの方法を考えてみてください。開放的なオフィスデザインは、そこで働く人々を明るくし、活性化させます。そして、本来、そのことに最初に気づかなければいけなかったのは、私たち日本人だったのです。

仕切りの方法

※『インテリアと日本人』内田繁著(晶文社)より抜粋

一般に仕切りの構造を大別すると、三つの異なる方向を見出すことができる。第一の方向は「物理的仕切り」、つまり恒久的で容易に動かすことができないような、障害物としての仕切りである。力による仕切りともいえるし、デジタルな仕切りでもある。障害物の内側と外側とは遮断されており、何者の通行も遮断する。たとえば「万里の長城」から、小アジアの城壁都市「イリアスのトロイアス」や旧ユーゴスラビアの「ドブロブニク」など、蛮人や外敵の侵入を防ぐために強固な防御を張りめぐらせ、物理的な構造をもって完全に空間を囲んでしまうやり方である。仕切りの構造としては、基本的なものである。これほどではないにしても、西洋の建築はこうした傾向が強いであろう。人間が空間を囲い込む出発点としての基本的な構造である。

第二の方向として考えられるのは「認識的仕切り」である。それは物理的な仕切り、強固な仕切りとは異なり、「装飾的なもの、あるいは「印」のようなものにより、それとなく仕切られる空間分割である。このあたりから、日本文化固有の傾向を持つのだが、生垣、簾、門、欄、敷居、障子、襖、格子、暖簾、沓脱石、手水鉢、関守石などが、その代表的な例である。また、祭祀、祭りに伴う仮設的空間の多くは認識的仕切り、装飾的な仕切りである。

たとえば注連縄などに代表される、「シメ」という日本文化にとって重要なキーワードがある。「シメ」は「示す」「占める」「締める」と展開され、日本の空間分割の中心的な概念ともなる。「示す」とは標示的な意味である。神社の鳥居などは、内と外をつなぐための門としての機能を果たすと同時に、聖と俗との境界を表す標示的な意味を表している。関守石も、これ以上は中には入らないでくださいという意味を表す。このように「シメ」「示す」ことを表すサインを意味する。

一方、「シメ」「占める」の意味も表す。「占める」「占む有」を意味し、シメによって標示された境界の内部空間を表す。たとえば、四本の柱を注連縄によって囲まれた領域を私たちは神の空間「ヒモロギ」と認識することができる。この場合の「占める」は、聖域、神域を表し、注連縄はその境界を示すのである。またシメには「締める」という意味も伴う。「締める」は「纏結う」ともいいい、注連縄を引き渡すことを意味するこの概念が、日本文化にとって重要な意味を持つ。ちよつとややこしい話になりますが、ヒモロギによって「占め」られた空間は、神の呪力によって「締め」られた場である。日本では「占め」られた場は、また「締め」られなくてはならないのである。また「纏結う」は標を結ぶ意味をもち、物事の決着を祝って手でシメるというように使われたり、お相撲さんがまわしを締めるという意味である。まわしは、シメることによって神の呪力を体にももらせることでもある。また女性が髪を結ぶのもこれと同じ意味を持つ。結ばれた髪の上に付ける櫛は、神のヨリシロとして女性の身に呪力を与えるのである。

日本の空間を仕切り、分割することは一方で締めることでもあり、意識、認識のうえで行われる「シメ」こそ、仕切りの構造の隠れた特性なのである。

三番目の「仕切りの構造」は、仕切ることが生み出す、閉ざされた「内」と排除された「外」という二つの世界をつなぐための空間。「空白の領域」である。えんえんと続く伏見稲荷の参道、茶室の露地、縁側など、内にも外にもかわりをもたない無縁の空間、「空白の領域」も、日本文化の際立った特性だといえる